

報 告

第 38 回国際福祉機器展 H. C. R. 2011

神戸芸術工科大学 近藤 ま波

1. はじめに

今回で 38 回目となる国際福祉機器 H.C.R. 2011 が 2011 年 10 月 5 日（水）～7 日（金）の 3 日間にわたり 東京ビックサイトにて開催された。私は期間中の最終日に見学したので学生の視点から見た今回の福祉機器展の感想を報告する。

2. 感想

初めに、展示会を通して私が感じたこと、気づいたことのまとめを 2 つ挙げる。

- (1) 福祉機器は触ってみて初めて利用者の気持ちに近づくことができ、従来のものと比べてみて初めてそのよさに気付く。
- (2) 欲しい！ → 買おう！の決断は商品の付加価値と価格で決まる。

視線を合わせて視点を変えてみる

今回の展示会で実際に商品を体験して初めて得られた感覚があった。例えば、図 1 のボタン一つで高さが変えられる調理台と、取っ手の部分が改良され少ない力で持つことのできるフライパン。一目見ただけではそのよさが分からなかった。しかし、実際に車椅子に乗り従来のものと比較しながら使ってみると、普段私たちが普通に使っている調理台やフライパンが車椅子の方にとっては、いかに調理しにくいものであるかということを身をもって体験することができた。

このように、普段当たり前のように感じていた世界が少し目線を変えるだけで、多くの物理的障害に遭遇し、全く異なる世界に一変する。

のことから、私たちが福祉機器利用者のニーズに正確に答えていくためには、今、目の前にある当たり前と思い込んでいる日常を捨て去り、視点を変え、福祉機器利用者の立場を自ら体験していくことが重要である。障がい者の方や介護を必要とする方にしかわからない日常生活における様々な困難や想いに耳を傾け、福祉のスペシャリストである彼らに学んでいかなければならない。

そして、福祉の世界を知ることは、異なる視点から新たな問題を発見し、すべての人々に共通する生活の豊かさを改めて構築していく手掛りにもなる。そのことは日本の社会全体の質を高めていくことにも繋がると思う。



図 1 車椅子ユーザーのための調理台とフライパン

商品の付加価値と価格

私たちは普段ものを買う時、何を基準に商品を選んでいるだろうか。

私たちはものを選ぶ時、自分のニーズとその商品の機能や性能がマッチすることが一番大切である。しかし、その商品を欲しい！と思っても、買う前に私たちは必ずその商品の価格をチェックする。そして、手に入れる前に必ず商品の価格に悩まされるのだ。

これを私は「値段の壁」と呼ぶ。私たちがこの値段の壁を乗り越え、実際に商品を手に入れるためには、付加価値という新たな選考材料が必要となってくる。

私が今回の展示を見て感じたのは、商品の付加価値には様々なものがあるということである。例えば、他の会社にはない独自の機能や性能などのオリジナリティはもちろん、デザインの審美性、ネーミング、カラーバリエーション、売り方（サービス）などである。特に商品の売り方（サービス）は、商品の付加価値を大きく左右させる。福祉用具はスーパーやコンビニのように、お店に行って手軽に買えるものではないものがほとんどである。利用者は福祉に従事する専門員や企業側の知識を頼りに商品を選択する。その際に重要なのは商品を売る側のサービスであり、それはわかりやすい説明や丁寧な対応、迅速で正確な情報の提供など、商品を売る側がどれだけ利用者の要望に答え、商品を通して利用者自身の生活をサポートしていくかということである。

説明の仕方や展示の仕方次第で、同じ商品価値をもつものでも買いたい！と思えるものと、お金を出してまではなあ…と、感じ方の異なるものが今回の展示会でもいくつかあった。つまり、お金を払ってまで欲しいと思える価値、このプライスレスの部分が商品を購入する際には最も重要であると思う。

3. おわりに

私は今、神戸芸術工科大学でプロダクトデザイン、主に福祉の分野で活躍するためのデザインを勉強している。授業の一環で障がい者の立場を疑似体験したり、また自ら様々なボランティア活動を行い、お年寄りの方や障がい者の方と接する機会をつくってきた。

今回の大規模な福祉機器展を見学して、改めて私は人間の技術の進歩とアイデアの豊かさに驚かされた。しかし、昔に比べ福祉用具の研究や開発が進み生活が豊かになる一方で、商品の選択肢が増え、

消費者は何を買えばいいのか分からなくなってきたという問題点もあることがわかった。また、福祉機器はまだまだ高価なものが多く簡単に手に入るものでもないということも感じた。

ユニバーサルデザイン七原則の第一番目には「誰にでも公平に使えること」と述べられているが、七原則の中に「誰にでも手に入りやすい価格」とはどこにも書かれていない。高いお金を出さなければ不自由のない暮らしを手に入れられないというのは全く公平ではない。従って私は、「福祉機器＝特別＝高価」という概念をどうにか覆したい。そして、本当の意味での「誰にでも公平に使えること」を実現したい。

これからは、もっと専門的な知識を身につけ、このような展示会にも積極的に参加し、商品に対する視野を広げていくつもりである。また、お年寄りや障がい者の方に限らず、私たちの生活の様々な場面で遭遇する困難はたくさんある。それらを解消し、人々の生活を豊かにするだけでなく、生活の何気ないところに+ α の価値を与えるようなものをつくり、人々に幸せを届ける架け橋となりたい。



図2 リハエブースの様子